

## プロフィール

牛田 智大 Tomoharu Ushida



2018年11月に開催された第10回浜松国際ピアノコンクールにて、日本人歴代最高第2位、併せてワルシャワ市長賞、聴衆賞を受賞。2019年3月、第29回出光音楽賞受賞。

1999年福島県いわき市生まれ。父親の転勤に伴い生後すぐ上海へ渡り6歳まで育つ。

2012年2月（12歳）、第16回浜松国際ピアノアカデミー・コンクールにて最年少1位受賞。以降、本格的に演奏活動始める。

2012年3月、クラシックの日本人ピアニストとして最年少12歳でユニバーサル ミュージックよりCDデビュー。「愛の夢～牛田智大デビュー」（2012年）、「想い出」（2012年）、「献呈～リスト&ショパン名曲集」（2013年）、「トロイメライ～ロマンティック・ピアノ名曲集」（2014年）、「愛の喜び」（2015年）、「展示会の絵」（2016年）、「ショパン：バラード第1番、24の前奏曲」（2019年）、「ショパン・リサイタル2022」（2022年）をリリース。2015年「愛の喜び」以降、続けてレコード芸術誌の特選盤に選ばれている。

これまでに、国内の著名な指揮者およびオーケストラと多数共演を重ねたほか、シュテファン・ヴラダー指揮ウィーン室内管弦楽団（2014年）、ミハイル・プレトニョフ指揮ロシア・ナショナル管弦楽団（2015年／2018年）、小林研一郎指揮ハンガリー国立フィルハーモニー管弦楽団（2016年）、ヤツェク・カスプシク指揮ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団（2018年）各日本公演のソリストを務めるなど、全国各地の演奏会で活躍。その音楽性を高く評価され、2019年5月にはミハイル・プレトニョフ指揮ロシア・ナショナル管弦楽団のロシア公演や、8月にワルシャワ、10月にブリュッセルでのリサイタルに招かれた。2024年1月には、トマーシュ・ブラウネル指揮ブラハ交響楽団日本公演のソリストとして4公演に出演予定。

今までに、NHK総合テレビ「プロフェッショナル 仕事の流儀」ほか、様々な番組や媒体でその活動が紹介されている。

2019年に20歳を迎え、これを記念し2020年8月31日に東京・サントリーホールでソロリサイタルを行い大成功を取めた。また2022年3月、デビュー10周年を迎えて開催した記念リサイタルは各地で好評を博した。人気実力とも、若手を代表するピアニストの一人として注目を集めている。



Tomoharu Ushida  
牛田 智大  
ピアノリサイタル  
Piano Recital

2023年9月16日(土)

15:00 開演

秋篠音楽堂

お問い合わせ

秋篠音楽堂 TEL 0742-35-7070 (10:00~17:00)  
〒631-8511 奈良市西大寺東町2-4-1 ならファミリー6階  
<https://www.akishino-ongakudo.com>

主催 秋篠音楽堂運営協議会

## プログラム

L. v. ベートーヴェン L. v. Beethoven

### ピアノ・ソナタ 第31番 変イ長調 Op.110

I. Moderato cantabile molto espressivo

II. Allegro moto

III. Adagio non troppo-Fuga.Allegro ma non troppo

L. v. ベートーヴェン L. v. Beethoven

### ピアノ・ソナタ 第23番 へ短調 Op.57「熱情」

I. Allegro assai

II. Andante con moto

III. Allegro ma non troppo-presto

～ 休憩 ～

F. ショパン F. Chopin

スケルツォ 第1番 口短調 Op.20

スケルツォ 第2番 変口短調 Op.31

スケルツォ 第3番 嬰ハ短調 Op.39

スケルツォ 第4番 ホ長調 Op.54

## メッセージ

本日は足をお運びくださりましてありがとうございます。

ショパンは主に精神的な面でベートーヴェンの作曲スタイルを尊敬しており、実際ふたりの作品には多くの共通する要素を感じることができます。またベートーヴェンの作品ではロマン派的な要素を、ショパンの作品では古典派的な要素を感じていただけるのではないかと考えています。皆さまと共有できることを楽しみにしております。

牛田智大

## 曲目解説

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ 第31番 変イ長調 Op.110

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770-1827）は幼少期よりヨハン・セバスティアン・バッハ（1685-1750）の《平均律クラヴィーア曲集》を演奏し、徹底的にバッハの作曲法を学んでいた。晩年、ベートーヴェンが後期のピアノ・ソナタを書く以前の1817年、彼はふたたびバッハに向き合うようになった。この曲の終楽章に規模の大きいフーガが取り入れられているのはそのことが大きく関係している。一方、この時期のベートーヴェンは、ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル（1685-1759）の影響も強く受けていた。ベートーヴェンは晩年になるとオラトリオを書くことを計画。創作準備のためにイギリスからヘンデルの楽譜全集を取り寄せていることがわかっている。その影響はこのソナタの終楽章冒頭に置かれた、「嘆きの歌」から窺える。“con amabilità（愛をもって）”と指示された第1楽章はベートーヴェンの全ピアノ・ソナタの中でも特に旋律性の強い楽曲。ピアノの音域を広く使い奏でられる分散和音の輝かしさも印象的だ。第2楽章はスケルツォ風の軽快な楽曲で、当時の流行歌である《うちの猫には子猫がいた》や《私は自堕落、君も自堕落》の旋律が使用されており、ベートーヴェンの冗談好きの一面が垣間見える。第3楽章は「嘆きの歌」と輝かしいフーガから成る。悲劇的な開始から、一度息絶えたように停止するが、最後には力強く鼓動し、輝かしく希望に満ちたフィナーレとなる。

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ 第23番 へ短調 Op.57「熱情」

充実した技巧と劇的な表現が両立した演奏効果の高い作品であり、楽器の進化と手を携えることでさらに自身の創作を進化させ、深めていったベートーヴェンの書法がわかりやすく表れた例となっている。第1楽章は「F」による和音の連続といった激しい演奏が多用されているが、これは当時ベートーヴェンが愛奏していたエラール製の堅牢なつくりによる豊かな響きのピアノがあってこそ生まれたもの。第2楽章は変奏曲形式で、当時としてはかなり珍しい5つの変ニ長調が選択されている。高音の煌めきが印象的なこの楽章は休みなく第3楽章へと移行し、楽章同士の連結を図られているが、これは緩徐楽章を短くし、フィナーレへの導入部としての役割を与えるためである。これは《英雄》交響曲をはじめとする同時期以降の作品でも見られるものであり、ベートーヴェンの中～後期のソナタの全体的な傾向でもある。さらに第3楽章にはかなり長い繰り返し指示があるが、曲の重心を最後に置き、クライマックスを劇的に演出する、という意向で行われていると考えれば、この理由も納得できる。

ショパン：スケルツォ 第1番 口短調 Op.20

第2番 変口短調 Op.31

第3番 嬰ハ短調 Op.39

第4番 ホ長調 Op.54

「スケルツォ（Scherzo）」はイタリア語で冗談、滑稽、ユーモアという意味を持つ、速い三拍子、音量のコントラストの激しい器楽曲で、日本語では「諧謔曲」と訳される。ハイドンやベートーヴェンが交響曲やピアノ・ソナタなどに積極的に取り入れたことで良く知られるようになった。フレデリック・ショパン（1810-1849）はこの形式をピアノ・ソナタに用いるだけでなく、独立した、規模の大きな曲として仕上げている。4曲のうち3曲は「冗談」からはかけ離れた曲調となっているが、急速で軽やかな音型が展開するスケルツォの特徴的な楽想は取り入れられており、“A-B-A”の形式をとるといって、ベートーヴェンやハイドンの用いたスケルツォの形式も踏襲されている。

第1番は冒頭から激しい感情の爆発が見られるが、これは当時祖国ポーランドでのロシアからの圧制に反する武装蜂起が背景にある。ショパンは国のために武器を取り戦うことを望んだが、両親や親友に説得され、芸術家として戦うためウィーンに残った。その中で募る祖国への想いとロシアへの怒り、孤独が冒頭の強烈な響きの和音、錯綜する高速なパッセージによって表現されている。そして中間部に引用されたポーランドのクリスマス・キャロル《眠れ、幼子イエス》が彼の祖国や家族、そして友人たちへの愛情や思い出が託されているかのように優しく、あたたかく響く。第2番は、「問い」と「答え」が常にこの曲を貫く。第1番同様に音域の広い分散和音や跳躍が盛り込まれた技巧的な作品ではあるが、感情の爆発というよりは優雅さや旋律美が優先されており、短調でありながらも明るい響きに満ちている。中間部は穏やかな祈りのようなコラールとなるが、徐々に音型が細分化されていき、再現部を経て華やかなフィナーレへと向かっていく。第3番は三拍子に対して4連符の音型、そして曖昧な調性で開始する。二つの主題を持ち、一つ目は力強いオクターヴの連続による切迫感のあるもので、常に不安がつきまとう。もう一つの主題は静かな祈りと、降り注ぐ光のような穏やかな曲調で、それまでの感情を鎮めるような静けさがある。第4番は唯一の長調で、もっとも長大かつ「スケルツォ」らしい楽曲である。それまでの一瞬影が差すように短調にも転じるが、総じて明るさと輝きに満ちている。劇的な表現は見られないが、技巧的には4曲中最も難易度が高い。

長井進之介  
(ピアニスト / 音楽ライター)